

# SNS リテラシー教育における学習者の態度形成 ～自己認識と行動の変化

匹田 篤<sup>1)</sup>, 稲垣知宏<sup>1)</sup>, 長澤江美<sup>2)</sup>

1) 広島大学 総合科学部

2) スマートニュース メディア研究所

hikita@hiroshima-u.ac.jp

## Learners' attitude formation in SNS literacy education. ～ Self-perception and their behavior changes

Hikita Atsushi<sup>1)</sup>, Inagaki Tomohiro<sup>1,2)</sup>, Nagasawa Emi<sup>2)</sup>

1) Hiroshima university, School of Integrated Arts and Sciences

2) SmartNews Media Research Institute.

### 概要

筆者らは、これまで開発、活用しているウェブベースの SNS シミュレータを用いて、SNS に対する学習者の態度形成について研究を進めている。シミュレータにおいて学習者は自身の回答を選択し、それを他者の回答と比較することで、学習者の判断や解釈の多様さに気づき、そのことが、SNS 利用に対する過剰な自信を軽減させることを報告している(匹田,2023)。今回は、学習者の動機づけの可能性について、ARCS モデルを用いて調査をおこない、SNS シミュレータを用いた学習によって、学習者の動機が高まる要素について分析をおこなった。その結果、他が高まっている中で、自信が弱まったことが明らかになった。

## 1 はじめに

メディアリテラシー教育では、機器の操作、メディアの読み書き、メディアを批判的に読み解く能力、考えをメディアで表現する能力と併せて、メディアでの対話とコミュニケーションの能力が重要である(中橋ら 2004)。

情報活用能力についてはユネスコが「国際的なメディア情報リテラシーの評価と枠組み：国家の準備状況とコンピテンシー」(UNESCO:2013)で述べているようにメディアリテラシーの評価をコンピテンシーで測ることが検討されてきている。しかし、コンピテンシーの三要素である知識、能力、態度のうち、態度については、学習者の経験や社会環境に大きく依存するものであり、その教育指標については結論がでていない。

本研究では、SNS リテラシーにおける学習者の態度の形成を確認し、また学習者がどのような動機を得たかを調べることで、シミュレータによる学習効果を考察することを目的としている。

## 2 SNS シミュレータの概要

シミュレータ「To Share or Not to Share」[1] は web ベースで動作する。指導者は、必要に応じて新しいコースを作成し、その URL を学習者に示すことで、学習を始めることができる。学習者は、シミュレータが表示する記事の一つずつ読み、それをシェアするかどうか(公開シェア、限定シェア、シェアしない)と、どの程度信用するか(星1つから5つの5段階)を入力する。これを10の記事について繰り返す。

この作業ののちに、それぞれの記事について、他の学習者のシェア行動と信頼度を合わせた結果が表示される(図1)。これによって、学習者は、シェア行動や解釈の多様さを体感することができる。この作業を通じて、情報の解釈や表現における自身の態度を形成することにつながるというのが、我々の仮説であり、特に情報の解釈に自信がある学習者が、自信を減らす、すなわち自身の過信に気が付く、ことがわかっておりこれが態度形成の表れであると結論づけている(hikita, 2024)。

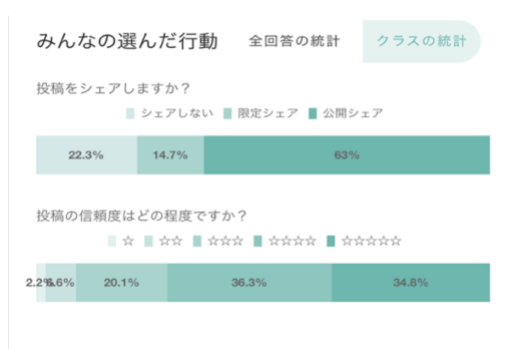


図1 SNS シミュレータの振り返り画面の例

### 3 方法

データを収集するために、本研究では広島大学の全学部の初年次生を対象にした「情報データ科学入門」という講義のなかで、メディアリテラシー教育の一環として、シミュレータを体験させ、その後にアンケートに回答してもらった。

表示させる記事のセットによる偏りが無いことを確認するために、各講義において、2つの記事セットを、受講生の半数ずつに使用してもらった。

この講義は、受講生の多さから、現在もオンラインで開講されており、本実験も、配信された動画を視聴し、その後にシミュレータを体験するものとなっている。

また、事前に試聴させる動画は、主にマスメディアを題材としたメディアリテラシーの学習であり、SNSなどのネットワークサービスについては、21世紀に必要なメディアリテラシーとして、本シミュレータの結果を見せながら、次週に動画で解説している。

#### 3.1 学習者の解釈と表現の自信の変化

学習者に SNS シミュレータによる学習の前後にアンケートに答えてもらった。以下の2つの項目について10段階で選んでもらった。このアンケートは、1回目と2回目、それぞれ SNS シミュレータによる学習の前に回答させている。そのため1回目のシミュレータによる学習効果による変化をみることができる。

表1 解釈と表現の自信の聞き取り項目

SNS（やインターネット）の書き込みを読み解くことについて、あなたはどの程度真偽の判断に自信がありますか

SNS（やインターネット）の書き込みをあなたが書くときに、あなたはどの程度表現が正しく相手に伝わる自信がありますか

#### 3-2 学習者の動機の要素

本研究では、学習者の動機の要素について注目し、SNS シミュレータを体験する前、または後において、学習者の動機の要素を測定するために、ARCS モデルを用いた。ARCS モデルとは、1983年に米国の教育学者 John M.Keller が提唱した学習者の動機付けを高める方法をモデル化したものである。

Meller は、学習者のやる気を引き出す要素を、注意 (Attention)、関連性 (Relevance)、自信 (Confidence)、満足感 (Satisfaction) の四つに分類している。

本研究では、ARCS モデルの各分類に対して、それぞれ四つの質問項目を作成し、合計16項目を五件法で各学習者に回答してもらった。

表1 ARCS モデルを用いた質問項目

| 分類  | 項目                   |
|-----|----------------------|
| 注意  | SNS シミュレータは面白かった     |
|     | SNS シミュレータの体験は眠くなかった |
|     | 好奇心をそそられる内容だった       |
|     | 授業に変化を感じた            |
| 関連性 | やりがいのある内容だった         |
|     | 自分に関係がある内容だった        |
|     | 身に付けたい内容だった          |
|     | 進めていく過程は楽しめた         |
| 自信  | 自信がついた               |
|     | 学習の目標ははっきりしていた       |
|     | 着実に学習を進められた          |
|     | 自分なりの工夫ができた          |
| 満足感 | 学んでよかった              |
|     | 学んだことが今後使えそう         |
|     | 社会人として認められた感じがする     |
|     | 授業には公平性があった          |

### 4 結果

#### 4-1 学習者の解釈の自信の変化

SNS の書き込みを読み解くことについての真偽の判断に関する自信の度合いを、シミュレーション

ョンによる学習の前後に 10 段階で聞いた。その結果を下図に示す。

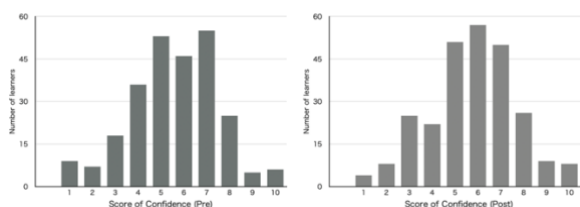


図2 自信の度合いのヒストグラム (左:事前、右:事後) (N=260)

このデータの分布は、図を見ると一見学習の前後で異なっているように見えない。しかしながら t 検定による p 値は、0.28 となっており、違いがあることを示している。

この事前の自信の値を横軸に、事後の値を縦軸にとったグラフを図3に示す。

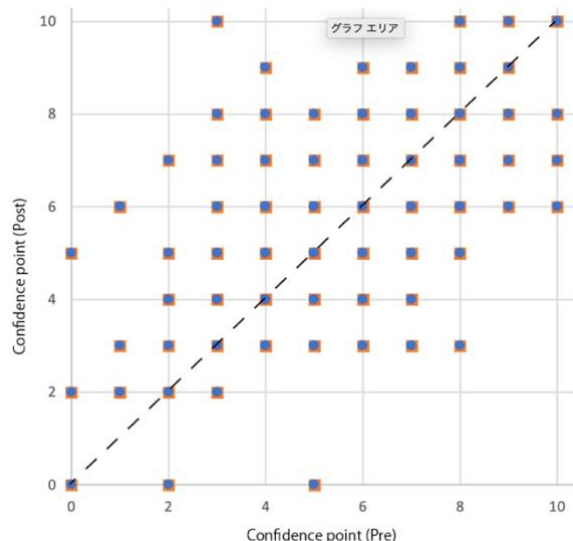


図3 事前と事後の自信の分布

図3において、破線より下の部分が、事前より事後のほうが自信の値が減ったことを表している。学習によって、本来自信が高まるはずであるが、このシミュレーションによって多くの学生（このケースでは実際には 260 人中 79 人）が自信の値を減らしている。

## 4-2 学習者の動機の要素

次に学習者の動機の要素について、ARCS モデルを用いた 16 項目についての結果を述べる。

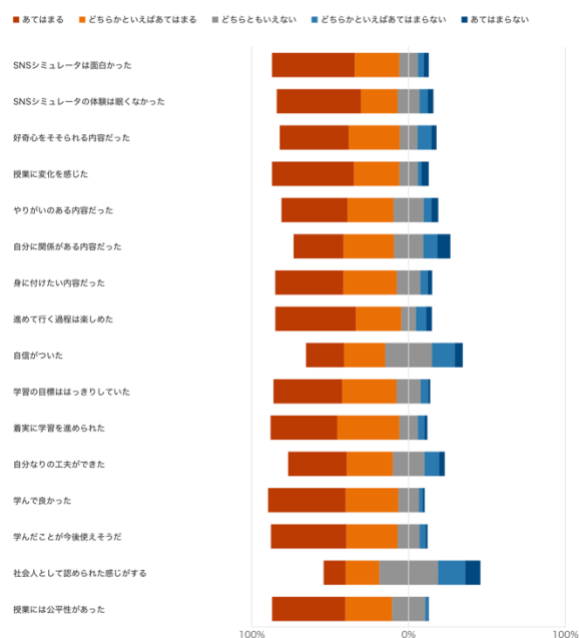


図4 SNS シミュレータによる学習後の動機の要素 (N=214)

この結果から、16 項目すべてにおいて、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」という回答が大変多い結果となった。一方で、「自信がついた」「社会人として認められた感じがする」の 2 項目については、他の項目と比べて明らかに、低い値を示している。このことから、「自信がついた」については予想通り下がったことが認められた。また、そのほかの自信に関する項目である、「学習の目標ははっきりしていた」、「着実に学習を進められた」、「自分なりの工夫ができた」については、値が下がらなかった。

「社会人として認められた感じがする」という項目については、大学初年次生であり入学後数ヶ月の学生にとっては当然と言える結果である。

図4のデータは、マスメディアを対象とした 20 世紀のメディアリテラシー教育を動画視聴により学習し、SNS シミュレータを再度体験した後の調査の結果であったが、さらに、このあとに SNS など 21 世紀のメディアの特徴を解説し、シミュレータを再度体験したのちに、動機の要素について調べたグループの結果を図5に示す。

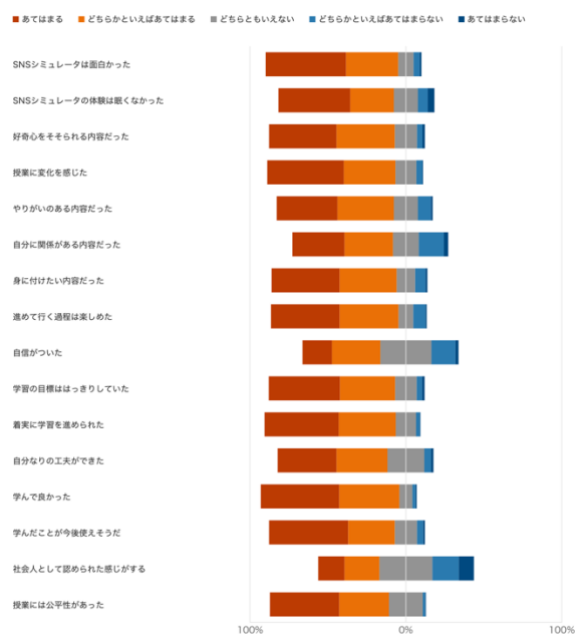


図 5 SNS シミュレータによる学習後の動機の要素：シミュレータを 2 回体験した後(N=254)

図 4 と図 5 を見比べてみると、差異がほとんどないことがわかる。

## 5 考察

本研究では、SNS というメディアに対する態度を学習者が自ら形成することを目的に、SNS シミュレータを用いて学習者自身に、解釈と表現の多様性を感じ取らせている。今回の研究によって、SNS に対する自らの態度変容について、態度変容を測る方法と、その際の学習の動機づけの要因が明らかになってきた。

一つは、学習者の過信の減少である。4-1 の結果から、記事の解釈に自信がある学習者が、SNS シミュレータによってその自信の度合いを減らしている。通常、学びの場においては、学習によって知識や技術を習得することで、自信が高まる。一方で今回のように自信が低くなるということは、知識や技術の習得ではない学び、すなわち態度の形成がなされたと考えられることができるだろう。

しかしながら、自信がもともと低かったグループは、自信が高まっている。これが知識や技術の習得によるものなのか、態度が形成された結果なのかは、判断することができない。

そのため、本研究の結果からいえることは、自分の能力に過剰な自信を持っていたグループが、自信の態度を変容または形成し、そのことで、自信の値が低くなった、ということとどまる。

二つ目は、学習者の動機の要素についてである。

今回 ARCS モデルを用いて 16 項目を五件法で尋ねた。4-2 の結果の通り、学びの結果としてどの項目も学びの動機要素に当てはまっていたと考えられる。その中で「自信がついた」「社会人として認められた感じがする」という二つの項目が他と比べて、明らかに低い値となっている。「自信がついた」と明確に自信という言葉を用いた項目は、態度の変容または形成を意識したものであり、シミュレータを用いた学習のあとに下がるだろうと予想した通りであった。この結果が、4-1 において自信の値を下げた学生群と、そうでない学生群で、どう異なるか、今後の分析が必要である。

また、SNS シミュレータによる学習は、平均すると 20 分程度の所要時間があり、その間学生は、誰かから指導を受けるわけでもなく、黙々と判断を下している。指導らしいのは、すべての作業が終わった後に表示される、シェアしたかどうか、その記事を信頼するかどうか、の二点についての他のユーザと自分の関係だけである。これらを提示し、学習者自信の解釈やシェア行動が、全てではなくまた、時にはそれが少数派であることを実感することが、学習者の学びの動機を高めるポイントとなっており、また態度形成に大きく寄与していると考えられる。

一方で、学びの動機のうち上に挙げた 2 項目以外の 14 項目についても、「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」と回答している学生が少数とはいえ一定数いる。この要因についても、今後の課題である。

## 参考文献

- [1] SmartNews media insutitute, “To Share or Not to Share”, <https://app.media-literacy.jp/> (最終アクセス 2024.10.20)
- [2] 匹田篤、稲垣知宏、長澤江美、“SNS シミュレータによる学習者の態度形成”、大学 ICT 推進協議会 2023 年度年次大会 (2023.12)
- [3] A. Hikita, T. Inagaki, M. S. Maekawa, S. Tajima, and E. Nagasawa, “Media Literacy Learning with Social Media Simulators and the Formation of Learner’s Attitudes”, IFIP-TC3 OCCE2024, (2024.2)
- [4] Keller, J. M., ” Motivational design of instruction”, Instructional design theories and models: An overview of their current status (pp. 383-434). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum. (1983)
- [5] 中橋 雄, 水越 敏行, “メディア・リテラシーの構成要素と実践事例分析”, 日本教育工学会誌, 27 suppl. (2003)